

るべし

小林賢太

新型コロナウイルスによる「自粛」と「物忌み」との連想はネットの中などにも散見するが、下旬の古典和歌ふうの表現はなかなか。物忌み等、平安貴族たちの入り組んだふるまいは、現代のわれわれから見ればうんざりするような面倒くさい手続きが必要だったらしい。それを思えば、言われるように、外出自粛等はなんでもない、のどかなことのように思える。

積もりたる心捨てよと早朝に雪下ろす音鈍く響けり

山口明子

雪国岩手在住の作者ならではの一首。早朝から屋根の雪を下ろす音が、近所の家から聞こえてくるのだろう。転勤の辞令を受けて、四月から勤務校が変わることをうたった今月の一連を頭に置いて読むと、「積もりたる心」の内容が推測される。

地の声を風が運べる十五階見下ろす先にパトカーな

らぶ

本川みや子

ここは十五階だから、地上からの距離は約四十五メートルほど。かなりの高さである。聞こえてくる音と十五階から見える風景。聴覚と視線が逆方向の矢印でうたわれているので、読者は、ふと不思議な世界に連れて行かれる思いが味わえる。

オリンピックク延期となりし日の夕べ父の命は延期と

ならず

武富純一

父の急逝をうたった今月一連、感傷や感情の表現を一切排して、事実や現実の描写だけでたんとんと表現し

きつて印象的である。父の死という作者にとつてはかけがえのない出来事だから、息子としての感傷や感情が入るのが当然なのだが、そこをあえてというか、意識的に制御して表現しているところがポイントであろう。この一首、まったく関係の無い父の命とオリンピックを「延期」という語で強引に関係つけた力技が、読者の心に独特の波紋を広げる。

雪解けの大地が甘い息を吐くひいふうみいとふきのとう出ず
佐々木寛子

雪国の春ならではのうきうきした気分と明るさを感じさせる一首。下旬のうたいものふうの語法も、待望する北国の春の歌にふさわしい。

明かりなきショーウィンドーにマネキンの春服脱が
す人影の見ゆ
谷ちえみ

マネキン人形の歌はよく見かけるので、どうしても既視感のある歌になりやすいが、「明かりなき」があつて、視点がショーウィンドウのごく近くだと読者に思わせる点が独特。すぐ近くでないと思えないはずだからである。

人に会はず人に映れるわが姿昼間の月のやうに失せ
ゆく
高山邦男

「人に映れるわが姿」がポイント。緊急事態宣言のおかげで、会合が中止になったり、会食がしにくくなったりと、人と会うチャンスがほとんどなくなったことで、「人に映れるわが姿」が失せてしまったというわけである。社会的な存在感と言い換えてもいい。「人に映れるわが姿」は、説得力のある表現と思う。